

文化的側面からみた大和市の特性

1. 歴史と伝統文化の息づく大和市

- ・大和の地には、日本の旧石器時代、縄文時代草創期研究を牽引する遺跡が多数発見されています。
- ・その代表としてあげられる「月見野遺跡群上野（かみの）遺跡」は、約2万3千年から1万2千年前の遺跡で、ここで発見された日本最古に位置づけられる無文土器の破片、縄文時代草創期の隆線文土器は、現在もなお、土器の発生期を知る上での重要な資料となっています。
- ・中世の時代に築かれた「深見城跡」は、県内でも、保存状態の良好な数少ない城跡の一つで、境川に面する斜面を利用した自然の要害と人工的に造られた要害を併せ持つ城の構造は、城郭史上、高い価値をもつものといわれています。
- ・江戸時代の和和は、多くの人々が行き交う交通の要所として栄えました。
- ・市域を通る、東海道の脇往還であった矢倉沢往還には、宿場として賑わいを見せた「下鶴間宿」があり、今でも、宿場のあった付近には、当時の面影が感じられる街並みがわずかながら残っています。
- ・また、大和市には、郷土の歴史や人々の生活を知ることのできる有形、無形の文化財や地域に古くから伝わる民間信仰が数多く存在しています。
- ・郷土民家園に移築復元されている「旧小川家住宅」と「旧北島家住宅」、「薬王院双盤念仏」や「福田神社囃子獅子舞」といった個性豊かな民俗芸能、そして、上和田の念仏行事である「ジャンジャン講」、福田地区で今なお続く「廻り地藏」など、これらはすべて、今日の世代に守り伝えられてきた貴重な文化遺産であり、市民のかけがえのない財産となっています。



縄文時代草創期の隆線文土器



深見城跡（復元模型）



薬王院双盤念仏



◀ジャンジャン講

お盆の送り火の後、8月17日の未明に行われる上和田地区の久田だけの行事。男子による厄払いの行事で、ジャンジャンと鉦（かね）を鳴らすのでこう呼ばれる。



◀廻り地藏

福田地区の新道下では、廻り地藏といって、厨子（ずし）に入ったお地藏さんが各家を廻っている。このお地藏さんはヤドナシ地藏とも呼ばれ、子育てのお地藏さんといわれている。

2. 多彩な文化イベントが行われている大和市

- ・大和市では、地域の商店会や団体、行政等との連携により、四季折々に様々な文化イベントが活発に催されています。
- ・春は、自然、歴史、文化を親しむことのできるイベントとして、市南部地域の花の名所を結ぶ「春の香りを訪ねて花めぐり」が開かれます。
- ・また、5月上旬には、ステージやパレードをはじめ、様々なイベントが催される「大和市民まつり」が行われ、市内外を問わず、多くの人々が訪れています。
- ・夏の訪れを告げる「神奈川大和阿波おどり」と「西口風鈴まつり」は、今ではなくてはならない大和の夏の風物詩として定着しており、中でも、今年で34回目となった阿波踊りは、現在、大和市で最も多くの来場者を迎えるイベントとなっています。
- ・秋に開催される「文化祭」は、50年以上の歴史を持つ文化イベントで、市が主催する一般公募展と、市民で組織された実行委員会の企画、運営による市民芸術祭が行われ、また、9月から11月にかけて、大和市で活動する文化芸術団体の発表会が市内各地で行われるなど、文化の秋にふさわしい催しが数多く実施されています。
- ・このほかにも、毎月第3土曜日には、大和駅前に200以上のお店が立ち並び、全国でも有数の古民具骨董市が開催されており、年間を通じたこうしたイベントは、市民の大和に対する愛着を高めるだけでなく、来街者が再び訪れたいと思う契機にもなっています



神奈川大和阿波おどり



西口風鈴まつり



春の香りを訪ねて花めぐり



やまとプロムナード古民具骨董市

3. 多様な文化を持つ人々が集まる大和市

- ・大和市には、現在、71カ国、6,300人を超える外国人の方が暮らしています。これは、本市の総人口の約3%にあたる人数です。
- ・本市に多くの外国人市民が在住している理由としては、次の出来事が大きく関係しています。
- ・第一に、インドシナ難民に対する定住促進センターが市内に存在していたことです。
- ・1975年(昭和50年)、南ベトナム共和国の崩壊などにより、インドシナ三国(ベトナム、ラオス、カンボジア)から大量の難民が国外へ脱出し、大きな社会問題となりました。
- ・これを受け、日本政府は、1979年(昭和54年)から、インドシナ難民への本格的な支援を行うために、国内に2つの定住促進センターを開設しました。
- ・その1つとして開設されたのが、南林間地区の「大和定住促進センター」です。
- ・同センターは、1998年(平成10年)に閉所されましたが、日本語教育、社会生活適応指導、職業の斡旋紹介などの定住支援を受けた入所者とその家族は、今もなお、大和市に多く暮らしています。
- ・第二に、1990年(平成2年)の「出入国管理及び難民認定法(入管法)」の改正により、日系人の入国が容易になったことがあげられます。
- ・この改正を境に、ペルーをはじめとする中南米からの外国人労働者の多くが移住し、その後、家族を母国から呼び寄せ、大和市に生活の基盤を移すようになりました。
- ・現在では、1,600人以上の中南米出身者が、地域社会の一員として、この地で生活を営んでいます。
- ・このように、大和に暮らす日本人は、厚木基地の存在もあって、早くから国際化や異なる文化を肌で感じており、これは他市にはない大きな特徴となっています。

大和定住促進センター

1980年(昭和55年)2月から1998年(平成10年)まで南林間に開設され、ベトナム戦争で生じたインドシナ難民に対する支援が行われた。全国で同様の施設が設置されたのは、兵庫県姫路市、大和市の2ヶ所

神奈川県内の外国人(平成22年1月1日現在)

1位:愛川町(6.4%) 2位:綾瀬市(3.9%) 3位:大和市:(2.8%)

大和市の外国人:合計6,310人(平成22年7月1日現在)

1位:中国(1,163人) 2位:ペルー(1,026人)
3位:韓国・朝鮮(1,018人) 4位:フィリピン(830人)
5位:ベトナム(496人) 6位:ブラジル(403人)
7位:タイ(205人) 8位:カンボジア(168人)
9位:米国(116人) 10位:ラオス(109人)